HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北方研究教育センター講演会「 講演と音楽の夕べ：サハリン先住民の声と響き」報告
Author(s)	山田, 祥子
Description	報告
Citation	北方人文研究, 7, 127-132
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55043
Type	other
File Information	jcnh07-09-YAMADA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈報　告〉

北方研究教育センター講演会
「講演と音楽の夕べ：サハリン先住民の声と響き」報告

山田　祥子
北海道立北方民族博物館　学芸員

本会は、2013（平成 25）年 9 月 27 日（金）18 時 30 分〜20 時、北海道大学人文・社会科学総合研究棟（W 棟）408 号室にて北海道大学文学研究科北方研究教育センターの主催により開催された。内容は樺太アイヌの弦楽器トンコリの演奏、ウイルタ語の研究や教育・復興についての講演、ウイルタの歌と踊りの披露の三部構成で、サハリン（樺太）先住民の言語状況に関する新しい情報や、多様なジャンルの音楽に触れる機会となった。以下、第 1〜3 部の内容を順に報告する。

第 1 部　トンコリの演奏

民族音楽研究者の篠原智花さんと、樺太アイヌの語り部として各地で公演活動をなさっている楢木貴美子さんによるトンコリの演奏を鑑賞いただいた。

トンコリは、サハリン（樺太）南半に居住してきた樺太アイヌに伝わる弦楽器である。篠原さんの解説によると、戦前の樺太ではトンコリの演奏をする人は珍しくなかったようだが、戦後北海道以南に引き揚げた後には数が少なくなり、樺太アイヌのなかでのトンコリの伝承はいったん途絶えてしまった。しかし、北海道以南へ引き揚げたトンコリ伝承者への取材が、1950 年代から和人の研究者によって行われたという。そのうちの一人が篠原さんのトンコリ演奏の師に当たる富田友子さんである。富田さんは、伝承者から直接トンコリを習って、演奏に必要な情報を記録した。

2012 年に北海道大学アイヌ・先住民研究センターより刊行された『西平ウメ伝承トンコリ楽曲集』（富田友子著）に、上述の富田さんが伝承者の西平ウメさんから取材した資料がまとめられている。楢木さんはこの楽曲集を用い、篠原さんとともに西平さんのトンコリ演奏を学んでいる。

解説ののち、魔物がサケの皮の靴を引きずりながら歩くようすを真似た曲（通称、イケレソッテ）、

写真 1：演者の（前列左から）フェジャエワさん、ビビコワさん、楢木さん、（後列）篠原さん

四足の高床式倉庫にキツネの家族が脂を盗みにやってきたところ子ギツネだけが上にのぼれず悲しそうに泣いているようすを表わした曲、キツネの家族が倉の食料をねらって裏の山から楽しそうに降りてくるようすを表わした曲、の 3 曲の演奏が披露された。

第 2 部　講演「第二の人生―自己への回帰」

ウイルタ語調査協力のためサハリンより来日されたウイルタ語伝承者のエレーナ・ビビコワさんとイリーナ・フェジャエワさんより、ウイルタ語研究や最近のウイルタ語教育について講演をいただいた。ロシア語から日本語への通訳は、北海道大学スラブ研究センター大学院生のアセーリ・ビダバロワさんが務めた。以下の講演録は、読み原稿と講演録音を報告者が編集したものである。報告者が補足する情報は［　］内に示す。

【講演録】

（ビビコワさんの話）　お集まりの皆さま、私たちは演題を「第二の人生――自己への回帰」としました。では「第一の人生」はいつだったのか、疑問に思われることでしょう。第一の人生は、私たちの子ども時代、青年時代、現役で仕事をしていた頃など、一般的な社会生活をしていた 1990 年代までのことです。ロシア語や、ロシア人の養育者、教師、同僚などに囲まれ、密接にかかわってきた人生でした。

ただしイリーナ・ヤーコヴレヴナ・フェジャエワさんは 1980 年代初め頃にはすでに、幼稚園でウイルタ語を教え始めていました。彼女の暮らすワール村はウイルタの居住地で、彼女は日ごろからウイルタの人たちと接してきましたし、ラリーサ・ヴィクトロヴナ・オゾーリニャやリディヤ・イワーノヴナ・セム、ユーリィ・アレクサンドロヴィッチ・セムなど研究者とも親交をもってきました。オゾーリニャさんとフェジャエワさんの研究は、二冊の辞書［Ozolinja, L. V. 2001 *Oroksko-russkii slovar': okolo 12000 slov.* Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN. ／Ozolinja, L. V. & I. Ja. Fedjaeva 2003 *Oroksko-russkii i russko-orokskii slovar'*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.］となって実を結びました。これらの辞書は、私たちウイルタへの、そして世界じゅうへの贈り物です。

1990 年頃はオゾーリニャさんらの辞書もまだ出ていなかったし、ウイルタについての文献がほとんどありませんでした。あったとすれば、図書館ですぐしわくちゃにされ、紛失されて、なくなってしまう二冊の本、ユーリィ・アレクサンドロヴィッチ・セムの採録による「ゲオハート」と「ウダラ・プジ」くらいでした。

1990 年に、私の住むノグリキ町に国際研究調査団がやってきました。そのなかには、チュネル・タクサミ、ガリーナ・オタイナ、ピエール・デ・グラーフ、村崎恭子、それに日本人の若手研究者たちがいました。私はそのとき町役場に勤めていて退職を目前に控えて休暇をとっていましたが、「ウイルタ語がわかるという教授が札幌の大学から来ていて、あなたに会いたがっている」という電話連絡で呼び出されました。私は興味をもってその教授に会い、ワール村まで同行して案内することにしました。

それが、池上二良先生でした。その頃はちょうど、今の私たちと同じくらいのお年でした。

池上先生と、若いお弟子さんの佐藤知己さんも一緒でした。池上先生はロシア語を少ししかご存じありませんでしたが、佐藤さんはロシア語が上手でした。池上先生と私たちはウイルタ語で話して、互いによく理解することができました。

ワール村で2〜3日調査をしました。どのように調査をしたか、ワール村の住人であるイリーナさんがお話しします。

（フェジャエワさんの話）　男性がワール村の私の家へやって来て、「ソロジェー」とウイルタ語で挨拶しました。私は「この人は誰だろう？　ウイルタ語で話しているけど、ウイルタに似てない」と思いました。その後、エレーナ・アレクセーヴナ［・ビビコワ］さんが「この方は北海道大学の池上二良教授です」と紹介してくれました。

ご挨拶と自己紹介ののち、お茶を飲みながら話しました。私は教授に尋ねました。「どうやって先生は私たちのことばを学んだのですか？」　池上先生のお話によると、1949年のある日先生が海辺を歩いていると、聞き慣れぬことばが聞こえてきたそうです。アイヌ語とは似ていません。先生は興味をもって、そのことばを話していた年配の男女の方に近づいてゆきました。たき火のそばで一緒に座って話してみると、二人がウイルタであるとわかりました。それをきっかけに、先生はウイルタ語の調査・研究を始めたのだ、と私たちは聞きました。

1991年、池上先生はワール村を訪問されました。そして、ワール村に住むウイルタ語話者であった私の母オリガ・ニコラエヴナ・セミョーノワや、ギシクタウダばあさんと呼ばれたマリーヤ・ステパーノヴナ・ミヘエワさんなどからウイルタ語の聞き取り調査をなさいました。池上先生はウイルタの昔話、叙事詩、歌謡、格言など、あらゆることに関心を持たれました。インフォーマントのおばあさんたちはときどきウイルタ語の単語を思い出せなくて言葉につまることがありましたが、そういうときも皆で笑って楽しい時間を過ごしました。そのうちに、ネクラソフカから私の叔母であるアンナ・ワシーリェヴナ・セミョーノワ［写真2右］もワールにやって来て、調査に加わりました。

このときロシア語・日本語の通訳をしてくれたのが井上紘一先生［写真3右］でした。おばあさんたちがウイルタ語で話したのを私がロシア語で解説し、それを井上先生が日本語に訳して池上先生に伝えました。

写真4の左側は、ギシクタウダばあさん（マリーヤ・ステパーノヴナ・ミヘエワさん）です［右側は池上教授］。写真5は、アンナ・ワシーリェヴナ・セミョーノワから聞き取りをしているところです［左から池上教授、セミョーノワさん、フェジャエワさん］。写真6の一番右では、当時のエレーナ・ビビコワさんが調査の補助をしています［左から、セミョーノワさん、ミヘエワさん、ビビコワさん］。写真7は、送別会のときに撮りました。このとき池上先生［一番左］は全部記録して帰り仕度を整えたあとで、ゆったりとお茶の時間を過ごされました。

もし私たちがあの時池上先生と出会わなければ、ウイルタ語の教科書はできなかったでしょう。私たちは、池上先生にとても感謝しています。

写真 2

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

（写真 2〜7：I. フェジャエワ氏所蔵）

（ビビコワさんの話）　続いて、1995 年から取り組んだウイルタ語文字教本［Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva 2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski*. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.］の編集についてお話しします。池上先生の主導でウイルタ語文字教本を作成するため、ウイルタのネイティヴによる編集チーム［エレーナ・ビビコワさん、イリーナ・フェジャエワさん、ミナト　シリュコさん、キタジマ　リュボーヴィさん］が結成されました。日本人の池上先生がウイルタ語の文字教本をつくるのは、もちろん容易なことではありません。一方、私たちは言語学の知識がないので、ウイルタ語の文法を説明することができませんでした。

文字教本の編集で、池上先生の集められた語彙のなかから、私たちが基本的な語彙を選ぶことになりました。文字教本に載せる語数は少なく、せいぜい 1000 語程度です。しかし、作業をしていくうちに私たちは、狩猟、漁撈、道具、家庭用語、工芸などさまざまな分野の語を整理することになりました。池上先生の指導はときに厳しいものでした。たとえば、私がウイルタ語のソリ sori「けんか」という単語を選んできたとき、そのような悪い習慣を表わす単語は入れなくともよいと言って、その単語を削除されました。

この作業が私を母語の世界へ呼び戻しました。さもなければ私は、おそらく、多くの語を忘れていただろうし、むしろ知りもしなかったでしょう。この意味で、文字教本の編集作業は私を、自己に呼び戻してくれたのです。私は池上先生にとても感謝しています。先生が、文字教本編集チームを主導するようにというロシア側からの要請を引き受け、ご自身の力を注ぎ、私たちにウイルタ語の研究の方法を教え、その大切さを理解させてくださいました。

長きにわたった編集作業と刊行の備えののち、2008 年にウイルタ語文字教本が刊行されました。刊行の後はこの文字教本の活用するため、教師がウイルタ語を教えるための指導書が必要となり、今年発行されました。

私たちは、ウイルタ語を教えるための取り組みだけでなく、他の分野でも努力をしています。たとえばユネスコの世界人権宣言をウイルタ語に翻訳し、これは 2012 年に発行されました。皆さんお察しのように人権宣言の用語は専門的で難しいため、ウイルタ語の訳語を見つけることは非常に困難でした。しかし、私たちは二人協力して翻訳することができました。そして最近は、ウイルタ語で刊行されようとするさまざまな文章の校正に取り組んでいます。

ウイルタ語の教育も容易には進みません。若い世代にとってウイルタ語は外国語なのです。新しい言語を学習するのは、当然難しいことです。

ノグリキ町では、博物館で子どもから大人までウイルタ語を学ぶために集まっています。このウイルタ語教室は「シライ・サーックラ」［ピンク色のイソツツジ］という名前です。山田祥子さんは、この会の発起人の一人です。彼女は［2010 年 4 月～2011 年 3 月に］私たちの町に暮らして、この教室を始めるきっかけをつくり、始まったあとは率先して生徒となってくれました。**ウイルタ語教室は**開始当初と比べると少し積極性がなくなっていますが、今も継続しています。

また、イリーナ・フェジャエワさんと一緒に、イーゴリ・ペトローヴィッチ・ネジャルコフが 1960 年代に採録した口頭文芸を翻訳しています。かつて、私が初めて池上先生の採録資料をラテン文字表記で表記したウイルタ語を見たとき、衝撃を受けました。今はそのようなウイルタ語の古い資料を自分で理解して翻訳できることに、私たちは大きな喜びを感じています。

年をとってしまったので体力的に難しいこともありますが、ウイルタ語の教育や発展のために、私たちは常に力を注いでいます。そして、その私たちを励ましてくれるのは、日本から訪れてきてくれる研究者の方々です。この方々のおかげで私たちの希望の灯が消えることはありません。ニヴフ語研究者の白石英才さんと丹菊逸治さんは、調査でノグリキを訪れるたびに私に会いに来てくれます。山田祥子さんは、もう私たちの身近な存在で、いつも私た

ちがウイルタ語で話すように励ましてくれます。津曲敏郎さんは、今回のように私たちを日本へ招いてくれる「父」のようです。皆さんの励ましがあるから、私たちは自分たちの母語で読んだり、母語を学んだりすることに興味をもって努力を続けることができています。いつの日か、私の孫が津曲さんや山田さんに師事してウイルタ語を研究してくれたらいいと思っています。

第３部　ウイルタの歌と踊り

講演につづき、エレーナ・ビビコワさんとイリーナ・フェジャエワさんによる歌と踊りが披露された。進行はビビコワさんが作成した寸劇風の台本をもとに行った。ウイルタ語の日本語訳は本稿筆者が予め作成し、字幕としてスクリーンに映写して、演技と同時進行でご覧いただいた。ここでは演者の解説にもとづき、計 13 の演目のうちいくつかを紹介する。

「シライ・サーックラ」（ピンク色のイソツツジ）は、かつてビビコワさんのお母さんが歌った子守唄のメロディーにのせてビビコワさんが作詞した歌で、ノグリキで行われているウイルタ語教室と同名の題がつけられている。「シライ・サーックラ」は昔多く見られたが、近年の道路敷設など自然破壊の影響か、今では見られなくなってしまった花だという。

ロシアの歌謡「暁と名づけよう」（G. ポノマレンコ作曲、V. ボーコワ作詞）は、ビビコワさんがウイルタ語に訳詞し、フェジャエワさんとともに合唱してくださった。本番になって知らされたことだが、これは筆者の博士号取得を祝うために特別に用意された、いわゆるサプライズであった。筆者にとっては過分の祝福であったが、お二人の気持ちのあたたかさが来場者にも伝わり感動を与えたようだった。

ビビコワさんが独唱した「ちょうちょ」は、エウェンキー民族に伝わる歌をビビコワさんがウイルタ語に訳した歌である。ビビコワさんが羽ばたく蝶を模した切り紙文様を手に歌い始めたときには、その愛らしい演出に来場者も顔をほころばせた。

輪舞歌「ホッホルジェー」では、演者と参加者有志が前に出て演者たちとともに輪になって踊った。本会の締めくくりに、会場全体が楽しい空気にあふれた。

以上紹介したもののほか、伝承歌「マウリ（踊り）」「お客さん」、あそび歌、ロシア語の歌「友との出会い（Встреча друзей）」の歌唱、および「みんな母語を知っている」「ユリ」などの詩４編の詠唱もあり、多様なジャンルで最後まで充実した内容となっていた。